

【大阪・関西万博】1日で世界数十か国の旅、博覧会のあらましと中小企業診断士として気になったパビリオン

国際部 中原健一郎

令和7年、「今年の漢字」は米と熊のデッドヒートの末、「熊」に決まったそうです。ですが、もし万博が漢字2文字ではなく1文字だったら、なんて考えても仕方ありませんが、結果は違っていたかもしれませんね。しかもなんと、「脈」が四位だったとか。

令和7年最大のイベントと言える大阪・関西万博は、4月13日から10月13日まで半年間に渡って開催されました。158の国と地域が参加し、来場者総数は約2558万人、開幕前は建設の遅れなどネガティブな評判、報道が目立ちましたが、終わってみれば大好評で成功裏に閉幕したと言ってよいでしょう。



会場内から望む大阪・関西万博のシンボル、「大屋根リング」

最近になって各種の数値データも最新版が出てきており、その経済効果は3.6兆円の試算と報道されています。(2025年12月19日、読売新聞オンラインより)

<https://www.yomiuri.co.jp/expo2025/20251219-GYT1T00001/?ref=msn>

万博とは国際博覧会（Universal Exposition）のことで、万国博覧会や EXPO と呼ばれ、「国際博覧会条約」に基づいて開催される博覧会です。万博を取り仕切る「博覧会国際事務局（Bureau International des Expositions, BIE）」はパリに本部が置かれ、この制度によって実施されるものが“万博”です。

1851 年の第 1 回ロンドン博以来、世界の最先端技術の紹介や地球規模の課題の解決に取り組む機会として、世界の人々が一堂に会して情報や文化の交流を図ってきました。

BIE のホームページ

<https://www.bie-paris.org/site/en/>

国際博覧会条約（外務省 HP）

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/hakurankai/banpaku/jyouyaku.html>

万博には 5 年に一度開催される大規模の「登録博」と、その間に開かれる各種の「認定博」が存在し、今回の大阪万博は登録博の方です。前回は 2020 年のドバイ（コロナの影響で 2021 年開催）、2015 年のミラノ、2010 年の上海、そして 2005 年の愛知万博「愛・地球博」をご記憶の人も多いと思います。そして次回の登録博は 2030 年、サウジアラビアのリヤドで開催することが決まっています。

次回は横浜では？とお思いの方もいるかもしれませんが、2027 年に横浜で開催予定の博覧会は「国際園芸博覧会」という認定博の方です。まあ、楽しみにしている人にとっては、登録でも認定でもどちらでもいいかもしれませんが（笑）。

2027 年、横浜国際園芸博覧会のホームページ

<https://expo2027yokohama.or.jp/>

2030 年、リヤド万博のホームページ

<https://www.expo2030riyadh.sa/en/>

今回の大阪・関西万博は登録博ということもあって、上述の通り世界 158 の国と地域が参加しています。会場内には多数のパビリオンがあって目移りするほどでしたが、数からいえば、これら参加国による“外国館”が圧倒的多数を占めており、万博の万博たる所以かもしれません。



音符をかたどったオーストリア館の外観。音楽の国ならではのデザイン

大阪・関西万博でのパビリオンは大雑把に分類すると、外国館に加えて主に日本の民間企業や行政組織が出展した国内民間パビリオンと、今回の万博のテーマである「いのち」を主題にした「シグネチャーパビリオン」と呼ばれる一群がありました。

実際に行った人はもちろん、報道等でも常に話題になっていた一部の超人気パビリオンは3～4時間待ちが常態化、会期終盤のかけこみ時期には半日待ちなどというケースもあったようです。その筆頭格の外国館はイタリア館で、続いてアメリカ館やフランス館、このあたりは開幕スタートからの人気でトップを走り切ったように思います。



人気のイタリア館の目玉展示、ダビンチの直筆スケッチ

一方で、ヨルダン館、クウェート館、ハンガリー館などは、開幕後の口コミなどでの高評価によってじわじわと人気上昇して行列が長くなっていき、定番人気パビリオンとして定着していったように見えました。



ヨルダンの観光名所で世界遺産の砂漠地帯、ワディ・ラムから運んだ砂を敷き詰めたパビリオン内部。砂漠の夜のような幻想的な雰囲気を楽しめた

また外国館は全ての国が一館のパビリオンを持っていたわけではなく、実際のところは「コモンズ館」と呼ばれる共同出展パビリオン内でのブース形式での出展が多数派でした。このコモンズ館は A から F まで複数ありましたが、一度の入館で多くの国の情報や文化に触れられるだけでなく、待ち時間がほとんどゼロということもあって、ファンも多かったようです。



コモンズ館の内部。たくさんの国々が自国文化を紹介している

ちょっと違う目線からだ、並ばなくてもすぐに入館できてしまうことを逆手に取って、入口の案内スタッフが会期中盤から「ヨヤクナシ、ドウゾ！」と歌い踊り始め、終盤ではステージ化して万博名物の一つになってしまったインドネシア館のようなパビリオンもありました。いずれも、インターネット上でも好評を博して広まったことが大きかったでしょう。



独特の呼び込みパフォーマンスが人気を博したインドネシア館の内部

今回の大阪・関西万博が当初の不評を覆して好評を勝ち得たのも、開幕後に SNS などを通じて、「おもしろい」という実体験の率直な評判が広まったからです。

また、「操作が難しい」と当初の万博の不興に輪をかけていた予約システムは、もちろん会期中に大幅な改修が行われたというわけではなく（混乱に拍車をかけることになるでしょう）、一つの反省点として残ってしまったのは確かですが、「並ばない万博」を目指した今回においては、その複雑な予約調整のための大きな役割を担ったことも確かです。

筆者が関東から少ない訪問回数であらかた概ねのパビリオンを回りきれたのも、この複雑なシステムがあったからこそです。全てのパビリオンが先着順の平等で、「とにかく並んでや〜」という方式であったなら、とてもこうはいかなかったでしょう。

システムでパビリオンを予約できるチャンスは2か月前、1週間前、3日前、当日の実質4回あり、最初の2回は抽選、後の2回は早い者勝ちでした。会期後半になればなるほど、抽選には当たらないし、早い者勝ちはすぐに無くなるしと、不満（諦め？）の声も大きくなっていったと感じますが、特に会期前半の空いている時期であれば、この4回をフル活用して効率的に見学することが可能だったのが、今回の万博の一つの特徴とも言えるでしょう。

さて、それらのパビリオンの中で中小企業診断士として気になったものをいくつか紹介したいと思います。

☆大阪ヘルスケアパビリオン「リボーンチャレンジ」

今回の万博の旗艦館の一つと言えるパビリオンで、25 年後（2050 年）の自分自身の姿を見られる「リボーン体験」が目玉でしたが、展示内容は多岐に渡り、ここでご紹介するのは「リボーンチャレンジ」の方です。



大阪ヘルスケアパビリオンの内部

リボーンチャレンジのコーナーでは、地元大阪の 400 を超える中小企業・スタートアップが、会期 26 週の間、テーマに沿って毎週入れ替わりで最先端技術の展示を行っていました。万博の国際見本市としての面を担っていただけでなく、まさに日本の中小企業の底知れない技術力がもたらす近未来の姿を目の当たりにすることができました。

「リボーンチャレンジ」の HP はこちら

<https://osaka2025.site/>

各週のテーマと出展内容、出展企業はこちら

<https://osaka2025.site/exhibit-info/>

リボーン体験の方は要予約でハードルは高かったですが、リボーンチャレンジは予約不要エリアにあり（人間洗濯機や ips 心筋シートの近く）、ご覧になれた人も多かったかと思います。しかも今からでも遅くはありません、出展企業とのマッチングサイトはこちら。

<https://jgoodtech.smrj.go.jp/pub/ja/lp/reborn/>

ちなみに、リボン「体験」の方では、最後に 25 年後の自身のアバターが、ヘルスケア的生活によって元気いっぱいになって踊りまくり（この場に居合わせた方たちのアバターに混ざって、筆者のもこの中に）、こちらも秀逸でした。



☆未来の都市

こちらは大企業による出展を中心にした大型パビリオンで、15 のアトラクションによって未来の姿を体験できる展示が所せましと続いていました。ゆっくり見ていたら半日はかかりそうな展示内容でしたが、収容人数も非常に多く、かなり離れた場所にあったためか、予約の非常に取りやすいパビリオンでもありましたから、こちらもご覧になった人が多いのではと思います。



未来の乗り物に興味津々の来館者たち

「未来の都市」パビリオンの HP

<https://www.expo2025.or.jp/future-index/future-life/city/>

同アーカイブサイト

<https://www.expo2025.or.jp/expo-archive/futurecity/>

提唱された「Society 5.0」に向けて企業が取り組む課題やあるべき姿を、じっくりと考えさせられる展示内容でした。



現在は Society 4.0 付近。新しい幸せをもたらす 5.0 への道のりはこれから

☆TECH WORLD



TECH WORLD 館の外観。台湾の山々を想起させるデザイン

台湾は上記 BIE に加盟しておらず、“台湾館”という外国館はもちろんありませんでした。TECH WORLD は玉山デジタルテックという台湾の民間企業によるパビリオンですが、玉山をはじめとする台湾の自然とともに、世界をリードする半導体産業の未来を豊かな映像を駆使して伝えていました。



ちなみに、玉山は台湾最高峰（3952m）の山の名前で、日本統治時代の「新高山（ニイタカヤマ）」のことです。

このパビリオンでは来館者全員に、パビリオンと台湾の山をイメージしたトートバッグを記念に配布しており、ハズレなしで大行列の「ミャクミャクくじ」に並んでいる時間がなかった筆者にとっては、この万博唯一の自分へのおみやげとなりました。



☆スイス館

スイスと言えば日本人にはハイジのイメージが大きいですし、当パビリオンの入口出口ではハイジを訴求した展示が耳目を引いていましたが、AI などのテクノロジーによるイノベーションに関する展示が豊富でした。



中小企業診断士の世界でも AI に関する勉強会やセミナーは数多いですが、AI がいかに簡単にディープフェイクを作り出すことができるかという展示内容は、筆者にはとても学び得るところの多いものでした。

また、AI によって撮影写真をその場で“スイス風変換”してくれる装置もあり、東アジア系からヨーロッパ風になった自分の顔には驚きと笑いを禁じ得ませんでした。もはや、AI に関しては「何でもありだな」との所感を持たせてくれたパビリオンとなりました。

☆いのちの未来

未来を示唆する多くのパビリオンが、自分がまだ命を繋げられそうな近未来を予言していたのに対し、一番遠くの未来をも示していたのがシグネチャーパビリオンの一つである「いのちの未来」ではなかったでしょうか。

アンドロイドと暮らす近い将来の展示では、家族を前にしてアンドロイドに記憶を引き継いで生き続けるか、それとも自然な死をむかえるかという、「新しいいのち」に対しての難しい哲学的な問いかけがありました。



そして最後はおよそ 1000 年後、人間とアンドロイドの境界はあいまいになり、現人類とは姿かたちを異にしたアンドロイド生命体が、見学者の前に現れます。



幻想的なアンドロイドですが、表情の動きはものすごく精緻で、近寄ってきて手を差し伸べてきて、微笑みかけてきて、目がしっかり合うんです。。思わず後ずさりしてしまいました。

万博らしいといえば万博らしい非常にインパクトの強いパビリオンでしたが、最後に投げかけられた、プロデューサーの石黒浩氏の

「人は自ら未来をデザインし、生きたいいのちを生きられる」

という言葉が、基本的には明るい未来を示唆しているようで、少し重たくなっていた気持ちが救われたように感じられたことも非常に印象的でした。

これらのパビリオンに限らず、ショーやナショナルデーなどの各種イベントが毎日のように開催されるなど飽きさせない工夫もあり、万博の盛り上がり到大いに華を添えていました。結果的には延べ 2558 万人もの人が、この地で数多くの国々の文化や人々に接することができたことによる化学反応は絶大です。

付随して発生した問題や今後の課題も存在しますが、中小企業の国際的活動を支援する国際部の一員としては、楽しさだけでなく、日本のソフトパワーに与えた影響と意義を実感せずにはられません。

大人のみならず、子供たちにとっても名前を聞いたこともなかった国々との一つ一つの出会いが、またいつかどこかで運命の歯車が絡み合って花開き、将来の世界における日本の存在感を有機的に育む土壌となっていくことでしょう。

最後に、コロナ禍にもかかわらず準備を万端進めてこられた関係者の方々と、開催中の現場を半年間に渡ってつつがなく案内、切り盛りして楽しませてくれた多くのスタッフに厚く敬意と御礼をお伝えして、結びとしたいと思います。